『われは海の子』

松浦　昭

　私は声を出すことがボケ防止になると聞いたので、毎朝、童謡・唱歌を口ずさんでいる。歌詞はすべて読むようにしている。
　情景描写の素晴らしさ、日本語の美しさに感嘆している。たとえば高野辰之作詞の『もみじ』は色彩が目に浮かぶようである。

秋の夕日に 照る山紅葉(やまもみじ)
濃(こ)いも薄いも 数ある中に
松をいろどる 楓(かえで)や蔦(つた)は
山のふもとの 裾模様(すそもよう)

　そうした中、アレ！と思う歌に出会った。
　童謡『われは海の子』である。これは1910(明治 43)年発行の『尋常小学読本唱歌』で発表された文部省唱歌で、2007年には「日本の歌百選」に選出された日本を代表する曲の1つである。
　「われは海の子　白波の･･･」で始まり、歌詞は7番まである。1番から6番までは曲名のとおり海を相手に少年が成長して行く姿を描いている。ところが7番になると急に内容が変わる。
　「いで大船(おおふね)に乗出して　我は拾わん海の富　いで軍艦に乗組みて　我は護(まも)らん 海の国」となる。
　勇ましい愛国歌だったのである。
　敗戦後7番の歌詞はGHQの目に留まり、国防思想や軍艦が登場するという理由でGHQの指示により教科書から削られた。1947(昭和22)年以降、小学校では3番まで教えられている。 90歳くらいの方でないと、7番の歌詞には出会っていないと思われる。
　この歌が作られた1910年には、大逆事件が起こり、韓国が併合されている。前年には韓国併合に大きな役割を果たした伊藤博文が暗殺されている。戦時体制とはいわないまでも、世情は穏やかではなかったようである。このような社会背景をもとにこの歌はつくられたのである。
　GHQの調査研究が、童謡唱歌までに及んでいたことは驚きである。
　ルーズベルト大統領は、1941年にアメリカ合衆国の諜報・プロパガンダ機関として戦時情報局を設置した。海外のニュースやレポート、そして国内外のプロパガンダを分析するという新しい任務も負っていた。

戦時情報局には非常に多彩な学者集団が集められた。戦争遂行には戦力だけでなく文化を理解することが重要だと考え、海外戦意分析課を設けた。

恩や義理などといった日本文化『固有』の規範を分析した『菊と刀』(1946年に出版)で有名なルース・ベネディクトは日本班チーフであった。

ベネディクトは、日本を訪れたことはなかったが、戦時情報局の同僚の報告書などの文献を熟読する他、日系移民との交流を通じて、日本文化の解明を試みた。アメリカは戦時中に日本文化について通暁していたのである。

日本は軍事力のみならず情報戦でも遅れをとっており、敗戦は避けることはできなかったのである。